

式 辞

平成27年度入学式

春の息吹に草木が芽吹き、春爛漫の好季を迎えている今日の佳き日に、ドミニカ共和国特命全権大使 ドミンゲス・ロドリゲス 閣下のご臨席を賜り、また日本体育大学全国同窓会 瀧澤康二 会長のご来臨を頂き、ここに新入生 1687名の皆さんをお迎えして平成27年度の入学式を執り行います。ご来場の皆様とともに、この慶事を心よりお喜び申し上げます。

新入生の皆さん！ ご入学おめでとうございます。日本体育大学は、心より、皆さんを歓迎いたします。またご両親、保護者の皆様、本日は誠におめでとうございます。衷心よりご祝意申し上げます。日本体育大学はただ今ここに、お子さんたちをしっかりとお預かりいたしました。

さて、新入生の皆さん！ 皆さんは124年の歴史と伝統を有する日本体育大学への入学が、今ここに、許可されました。本学は体育及びスポーツに関する学問を教授し、かつまた身体と運動に関する教育と研究を推進してきた、日本で最古の私立大学です。本学の設立母体である「学校法人 日本体育大学」が誕生したのは明治24(1891)年ですが、この時点から体育教員養成に着手し、2年後の明治26(1893)年には正式な体育教員養成機

関として「日本体育会体操練習所」を開設させました。この練習所は各種学校から専門学校へと発展、これに合わせて「日本体育会体操学校」、「日本体育専門学校」へと名称変更を経験して行きますが、戦後の昭和 24(1949)年に新制大学として再編し、「日本体育大学」が誕生しています。そして昭和 55(1980)年 4月から「ニッポン体育大学」と呼称を改めて、現在に至ります。

新制大学に衣替えしてから本学は体育学部体育学科の単科の大学としてスタートしますが、その後、時代社会の要請に応じて、健康学科・武道学科・社会体育学科の3学科を増設しました。平成 25(2013)年 4月に新学部として「児童スポーツ教育学部」を開設し、さらに昨年の 4月からは新々学部「保健医療学部」を新設しています。この間、昭和 50(1975)年に大学院体育科学研究科修士課程を設置し、平成 10(1998)年から博士後期課程を開設して、修士及び博士の学位を授与して現在に至っています。こうして本学は幼老男女の別を問わず、日本の体育及びスポーツの発展と保健・医療・福祉の発展を願って、これに関する教育と研究の中核的拠点として優れた研究と有意な情報を発信するに至っています。

いっぽう本学が誕生してまもなく、1894年にIOC、国際オリンピック委員会が結成されています。以来、本学はそのIOCと日本で最初に接触を図った

大学として知られているところですが、オリンピックの歴史とともに歩みながら、自らの大学の歴史を刻んできたともいえます。すでに、1900(明治33)年、第2回オリンピックパリ大会時に開催のIOCの会議に本学代表が出席、さらにこれを機に1906年のオリンピック競技大会開催10周年記念大会(「中間オリンピック」)に選手を派遣するよう促す書簡を受け取っています。残念ながら選手の派遣に至りませんでした。1912年に日本が最初にオリンピックに参加することになる第5回オリンピック・ストックホルム大会に選手を派遣する団体になって欲しいと、改めて、IOCから期待されました。しかし、この時もこの選手派遣は本学の手で成し遂げることはできませんでした。1940(昭和15)年、日本はオリンピック招致に成功し、東京世田谷キャンパスに隣接する駒沢運動公園を主会場にして第12回大会を開催することで決定をみていました。これは本学がオリンピックと関わる大きなチャンスでもありました。しかし、ここでも日中戦争の勃発でオリンピックの返上のやむなきにいたり、再度、そのチャンスを逃したといわねばなりません。

そして戦後、国際スポーツ界に復帰した日本は、1964(昭和39)年に東京オリンピックを開催します。これを契機に本学のスポーツは大きく飛躍し、多くの卒業生を通して日本のスポーツの奨励・促進に大きく預かってまいりました。数多くのオリンピックも誕生させています。

2018年、2019年及び2020年に、東アジアでは大がかりなスポーツの国際大会が次々に開催されます。2018年には、韓国は平昌(ピョンチャン)で冬季オリンピック・パラリンピックが開催され、2019年には、東京を中心にラグビーフットボールのワールドカップの開催が予定され、そして2020年には同じく東京へ、私たちが待ちに待ったオリンピック・パラリンピックがやってまいります。本学は全学を上げてこの2020年の夏に開催の国民的祝祭であるオリンピックとパラリンピックを積極的に支援してまいります。5年後の開催ですが、新入生の皆さんもこの戦列に加わって頂きます。選手として、ボランティアとしてこのオリンピックとパラリンピックを支援して欲しいと希^{ねが}っています。

皆さんは「オリンピック・ムーブメント」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。これは、「スポーツを通して平和な国際社会を実現させるための運動」、であると理解して下さい。本学が果たそうとしている社会的使命は「建学の精神」、つまり<体育富強基>から導かれています。その一つとして「わが国のスポーツ文化の深化・発展に努めるとともに、オリンピック・ムーブメントを主導的に推進し、スポーツの『力』を基軸に、国際平和の実現に寄与する。」ことを掲げています。「平和」の対極にあるのが「戦争」ですが、昨今は、いま、世界各地での紛争は絶えず、戦禍は避けようもないのが実情です。昨年2月に開催されたソチ冬季オリンピックにおいて バッハ IOC 会長が開会式でこう主張したと報

道されていたことに注目して欲しいと思います。会長は「オリンピックは人々を結びつけ、人々を分かち壁を作らず、多様性を受け入れる。」と語った上で、「世界の政治リーダーに言いたい。選手は国の最高の親善大使だ。オリンピックが発する友好や平和のメッセージを尊重して欲しい。」と訴えているからです(『毎日新聞(夕刊)』、2014年2月8日)。

いまこそ、こうしたオリンピックの理念は世界中に浸透していかなければなりません。体育やスポーツの普及・進展を図ってきた本学に入学した皆さんには、人種の違い、民族の違い、宗教の違い、思想・信条の違い等乗り越えて、平和な国際社会の実現に向かって欲しいと思います。そのためには、私たちは人種や民族や、宗教や、思想・信条に対して偏見を持つてはなりません。

今年の6月にサッカーワールドカップがブラジルで開催されましたが、ボスニア・ヘルツェゴビナが出場したことを覚えていますか。この国は三つの異なった民族がそれぞれ異なった宗教を信じる国民からなる国ですが、首都サラエボを中心に各地で紛争が絶えませんでした。かつて日本代表を率いたイビチャ・オシム監督が民族ごとに結成された三つのサッカー協会を一つにまとめ、その上でこの国をワールドカップ予選に出場させ、さらに本大会出場の栄冠を手に入れています。これはサッカーというスポーツが相互にいがみ合っていた諸民族を友好・親善の輪の中に取り込んだことを物語っています。オシム監督は「サッカー

とは何というか人と人を結びつけるものだ。本当はみんな共存を望んでいる。」

(民族共存のキックオフ～“オシムの国”のW杯、NHKスペシャル、2014年6月22日放映)と語ったのには理由があったのです。今回のW杯ではボスニア・ヘルツェゴビナ代表の戦いが注目されていました。1914年に同国の首都サラエボで起きたオーストリア皇太子暗殺事件が、第1次世界大戦の引き金になったことは周知のことですが、今から20年近く前には、内戦によって三つの民族が殺し合い、和睦後もいがみ合いが続いていました。そんな中で、繰り返しになりますが、オシム元全日本監督は祖国のために尽力して一つの代表チームを誕生させ、W杯の予選を勝ち抜いて本戦のブラジル大会への出場を達成しています。そのオシム監督に影響を受け、親友であると語る現日本代表監督のハリルホジッチ監督は、ボスニア・ヘルツェゴビナの内戦の渦中であって「警察と兵隊との間に入って銃撃をやめるように訴えた」(『朝日新聞』2015年3月14日付)ことで知られていますが、周囲の人たちに「民族は違ってても互いを尊重して生活すればいい。」(『朝日新聞』2015年3月26日付)と語りかけているのです。

サッカーのボールはいかなる国もいかなる民族もいかなる宗教も選ぶことなく、自由に思うが儘に転がっていきます。だからこそ、サッカーというスポーツが持つ「平和」を醸す機能はとても大きなものがあるといえます。これに着目したのが昨年10月30日に開かれた国際連合総会での決議でした。同総会では「スポ

スポーツ界の独立性と自治の尊重及び国際オリンピック委員会 (IOC) の任務の支持」(「国連決議—政治の台頭に備えるIOC、『産経ニュース』2014年11月18日付) について決議を行ったからです。これはオリンピック・ムーブメントにとって、またスポーツ界にとって歴史的・画期的な出来事であるといわねばなりません。

しかし、だからといって、スポーツの「力」を信じて、「平和」がやってくるのを待つのではなく、スポーツの「力」を信じて「平和」を呼び込むことが大切です。本学は「建学の精神」を体して、国交の閉ざされた朝鮮民主主義人民共和国を代表する朝鮮体育大学と2度に亘ってスポーツ交流を図りました。それは同時に、「平和の使者」、「国際親善大使」の役割を担うことでもありました。2020年に東京でオリンピックとパラリンピックが開催されますが、開催都市に立地する体育大学であるからこそ、担わねばならない使命であると考えています。

スポーツは笑顔、勇気、活力、希望を私たちにもたらしてくれることを、東日本大震災後の支援活動を通して、誰もが実感してきたところですが、東京でのオリンピックとパラリンピックの開催は、国際社会に対して、復興がなった日本
このころ
の姿を発信するための、また震災時に頂いたあらゆる支援に対して感謝の意を表明するための絶好の機会でもあります。「2020年を、未来が記憶するす

ばらしい年にしよう。」(東京オリンピック・パラリンピック組織委員会によるキャッチ・コピー)ではありませんか。

本学が探求せんとする諸学に通底するキーワードは身体であり、健康であり、スポーツであり、体育であり、そして遊びであります。これらはいずれも現代人が日常生活をおくる上で最も重要な要件でもあります。皆さんはこの点について考えたことがあるでしょうか。

自動車のハンドルやブレーキペダルに、効き目のない遊びの部分があります。それを“ゆとり”と言い換えてもいいかもしれません。遊びは広い意味のスポーツと同義です。その自動車の遊びの部分は急ハンドル、急ブレーキを避けるために用意されているものですが、道路信号の青と赤に挟まれた黄色信号と同じ役割を果たしています。これがあることによって安全な運転ができ、結果として事故を回避することができます。皆さんがこれまで没頭してきたスポーツや遊びを皆さん自身の人生の中に位置づけてみて下さい。豊かな満ち足りた人生を送るためには、ハンドルやブレーキペダルの遊びと同じように、スポーツや遊びは欠くべからざるものになっていることが分かります。このスポーツ及び遊びを健康教育というフィルターを通せば、体育の世界が誕生します。

いっぽう、遊びは先の大地震・大津波・原発事故の恐怖によって幼い子どもたちだけでなく、被災した方々の閉ざされた心の扉を開き、笑顔を取り戻す力を持っていることを、私たちは、アスリートやスポーツボランティアの活動を通して知ることができました。同時にまた、“いのち”の尊さ、仲間とともにつながりを生きることの大切さ、生かされている“いのち”への自覚について、被災地の方々から教わってもまいりました。このようにスポーツは人びとに笑顔、勇気、活力、希望をもたらし、さらには人間としての心豊かな人生の処し方を教えてくれます。逆境をはねのける力や、悲しみを乗り越えて未来を切り拓く力も持っています。

2011年6月、「スポーツ基本法」が制定され、国民の一人ひとりがスポーツを通じて健康にして幸福で豊かな生活を営む権利を手に入れました。老若男女を、また健常者・障害者を問わず、新たなスポーツ文化の創造が期待されています。すでにスポーツは日常的に異なった国籍や文化をもつ人たちとともに競技をして、それぞれが差異^{ちがい}のわかる世界を発見し、平和な国際社会の実現に向かってきました。

皆さんは本日から遊びやスポーツや体育や医療を学問としてただ単に学ぶのではありません。人間が生きて行く上で有用なものとして学んでいきます。医学の知識は病気を癒し、健康をもたらしてこそ意味があり、建築学の知識は家を

建てることができ、こそ役に立ちます。学問の多くは生活の実際とつながりをもつことによつて活きた学問になり、知識になるといわねばなりません。体育科学、スポーツ科学、健康科学、児童教育学、幼児教育学、保育学、保健医療学などの学問を修める場合も同様です。この観点から、皆さんがスポーツ、体育、運動、遊び、医療などの現場におけるあり方を考えることを期待いたします。

私たちは、いま、スポーツの奨励と促進に歯止めがかかってしまうかもしれない大きな問題に直面しています。体罰、暴力、パワーハラスメントの問題です。日本体育大学は一昨年2月に体育及びスポーツの指導現場における「反体罰・反暴力」を宣言いたしました。いかなる事情があろうとも体罰も暴力もパワーハラスメントもこれを排除するという宣言です。

皆さんの中には、これまでの輝かしいスポーツ歴の中で体罰の名の下で暴力を受けた方、罵声・暴言・パワーハラスメント・セクシャルハラスメントを経験した方、あるいはそのような場面に遭遇した方は少なくないように思います。皆さんの中に、勝利のためなら多少の心身の痛みを伴っても、当然、そのような狼藉ろうぜきを受け容れるべきである、とと思っている人はいませんか。もしいるとすれば、体罰・暴力・パワーハラスメント等を是認するような、そんな考えは、直ちに、即刻、過去のものとして葬り去ってください。また、自らが後輩に体罰という名の暴力行

為に及んだ経験をもっているとしたら、そのあなたに、猛省を促します。

日本体育大学は「体罰・暴力・パワーハラスメント等を行ってはならない、また行使させてもならない」という立場を堅持してきました。指導者は「誰もが好みで選手を選ぶことなく、嫌うことなく、見捨てることもない」、そんなことを指導理念とし、愛情をもって接して信頼関係を築かねばなりません。もしもこれからの生活の中で先輩がそのような行為に及んだなら、その実態を知らせて下さい。大学は、極めて厳正な態度で臨みます。

いま、わが国はかつて経験したことのない少子高齢社会を迎えています。地方にあつては過疎化社会の現実が、都市にあつては無縁社会の現実があります。
ひと ひと
す。人間と人間とのつながりが疎遠になっているのです。だから私たち国民一
しせい
人びとりは市井にあつて、この新たな課題に直面しつつある困難な時代を生き抜くための英知・知恵をもたねばなりません。女性に対して、高齢者に対して、病人に対して、障害者に対して、あるいは異文化を生きる人々に対して、利害を超えた対等な掛け替えのない存在として敬う心を培う必要があります。皆さん
ひと ひと
には、スポーツが人間と人間とを結びつける紐帯としての役割を有していること
ひと ひと ちがい
を再認識し、国際社会にあつて、スポーツを通して人間と人間との差異を認めることのできる世界を再発見するようお願い、皆さんの健闘を期待して、式辞とい

たします。

平成27年4月3日

日本体育大学

学長 谷釜 了正